



TITLE:

《書評》中村達也『豊かさの孤独』(岩波書店, 1992年)

AUTHOR(S):

根井, 雅弘

---

CITATION:

根井, 雅弘. 《書評》中村達也『豊かさの孤独』(岩波書店, 1992年). 経済論叢 1992, 150(5-6): 115-121

ISSUE DATE:

1992-11

URL:

<https://doi.org/10.14989/44868>

RIGHT:

# 經濟論叢

第150巻 第5・6号

---

スコットランド啓蒙における商業と軍事……………	田 中 秀 夫	1
サバ、サラワクの木材産業の持続的発展の 見通しについて……………	中 島 健 二	25
ローカル・ミニマム論の検討（2）……………	李 昌 均	49
商人と一次産品の価格決定……………	服 部 茂 幸	71
アジア NIEs 工業化過程の 政治経済学研究（1）……………	宋 立 水	88
<b>書 評</b>		
中村達也『豊かさの孤独』 （岩波書店、1992年）……………	根 井 雅 弘	115

## 学 会 記 事

經濟論叢 第149巻・第150巻 総目録

---

平成4年11・12月

京都大學經濟學會

〈書 評〉

中村達也『豊かさの孤独』（岩波書店，1992年）

根 井 雅 弘

中村達也氏といえば，私にとっては，『市場経済の理論』（日本評論社，1978年）の印象がいまだに鮮明に残っている。大学生の頃（1981-85），私は当時の多くの経済学徒がそうであったように，サムエルソンの教科書を読んでいた。しかし，彼の明快な説明には感心したものの，何となく物足りなかった。

物足りなかった理由は，今から思えば，彼の本があまりに正統派的であったからかもしれない。また，対立する経済学についての彼の見下したような論評も，好感がもてなかった。たとえば，彼はガルブレイスを評して，次のように言ったことがある。

「私は15年前のこと，経済学者仲間と同僚相手の会長講演で，経済学者でない人たちはガルブレイスを重要視し過ぎるが，同じ分野のわれわれは彼を軽く扱い過ぎると，あえて言ったことがある。……学会に籍をおくものの多くは，文章がうま過ぎることは一種の犯罪——重罪でないまでも非行——であると考えている。つまり名文でもって，自分の考えの重要性をその真正の価値以上にふくらませてしまうというわけだ。この考え方からすると，ガルブレイスは自動的に嫌疑をかけられることになる。読者数が多過ぎるような人は，したがって軽薄であるはずだと言われる！」（P. A. サムエルソン『経済学』第10版，都留重人訳，下巻，岩波書店，1977年，1421ページ）

ところが，中村氏の『市場経済の理論』においては，まさに「サムエルソン vs ガルブレイス」を軸に現代経済学の潮流が見事に整理してあったのである。最近では，過去の経済学説を現在の主流派の立場から数理的にモデル化するタイプの学説史が流行しているけれども，これでは主流派の考え方に馴染まない（しかし，極めて重要な）多くの問題が切り捨てられてしまう危険性がある。その点で，中村氏の本は，正統（サムエルソン）と異端（ガルブレイス）を交差させながら経済学説を評価する視点を教えてくれたように思う。

『市場経済の理論』以降，中村氏は『歳時記の経済学』（岩波書店，1985年）や『ガルブレイスを読む』（岩波書店，1987年）を著したが，これらの著作の中にも，いま述べ

た視点が生きていることは言うまでもない。

では、本書『豊かさの孤独』の特徴は何かといえば、それは、従来、正統派によって見過ごされてきた諸問題に「時間の豊かさ」という独自の視点から切り込んだ現代社会論であると要約することができるかもしれない。本書の内容は次の通りである。

第1章 「大国」主義の落とし穴

第2章 消費社会の孤独

〔補論〕メリハリを失った生と消費の賑わい

第3章 消費社会論をどう読むか

第4章 「豊かな社会」の欲求形成

第5章 失われた時を求めて

第6章 揺らぎの中のライフサイクル

第7章 脅かされる「身体の平和」——命と健康の消費者主権を考える

第8章 「不可視の世界」と経済学

〔補論〕方法としての歳時記

第9章 市場社会の行方——論壇の潮流をめぐって

もちろん、私には本書で提起された論点のすべてを論評する能力はないので、以下では、1)「大国」主義の拒否、2)重層的な非決定の中にある消費者「個人」の内なる「諸欲求」、3)時間の豊かさの重要性の三つに絞って見ていくことにしよう。

## I

1992年6月25日、首相の諮問機関である経済審議会が、「生活大国5か年計画——地球社会との共存をめざして」と題する答申を行なった。従来の企業中心の社会から生活者＝消費者中心の社会への転換を実現し、生活の豊かさやゆとりを実感できるようにしようというのである。

しかし、中村氏は、「大国」主義という思想そのものに疑問を投げかける。『「大国」を目指してひたすら疾走するのではなく、まずは足元に漂う不安と欠落感の解消こそが生活の充実につながると見るスタンスもありうるのではないか。』（4ページ）

中村氏によれば、類似の見解は、80年以上も前の夏目漱石や内村鑑三によって表明されているのだが、結局、そうした声は無視され、日本はひたすら「大国」を目指して疾走してきた。そして今日、日本は「経済大国」と呼ばれるようになった。ところが、豊

かなはずのこの日本で、「企業戦士」の過労死や「寝かせきり老人」などの「社会的な死」の問題が発生しているのである。

この点で対照的なのが、寝たきり老人がいないというデンマークの例である。というのは、デンマークの高齢者福祉が、1) 自己決定の尊重、2) 継続性の尊重、3) 残存能力の活用という三つの原則に基づいて運営されているからである。デンマークの一人当たりの国民所得は日本よりも少ないはずなのに、たとえば、その国の補助器具センターには、各種の補助器具があり、それらが無料で貸し出されている。デンマークほどの高水準の福祉を日本で行なおうとしたならば、どれだけの資金が必要か。ある試算によれば、それは年間およそ4兆990億円であるという。これは、1990年度の日本のGNP(430兆円)のおよそ1%に相当する。これだけの資金がいまの日本に捻出できないはずはないにもかかわらず、いまだにそれは実現されていない。中村氏は、こうした現状を憂えて言っている。

「高齢化が進む中で、高齢者の『社会的な死』は、最も緊急に解決を要する問題である。いつ自分自身が、そして家族がそうした状況に陥らないともかぎらない。そうした不安を残したまま『経済大国』は膨張する。ありあまる消費財に囲まれながら、『企業戦士』の過労死と『戦役』を終えた高齢者の『社会的な死』を解決できないとすれば、そうした『経済大国』は、やはり『妖怪』といわねばならない。」(16ページ)

ところで、デンマークといえば、1864年、第二シュレスウィヒ・ホルスタイン戦争の結果、シュレスウィヒとホルスタインの二州を失ったけれども、「外に失いしところのものを内において取り戻す」ことを目指して、森林と酪農の国を立派に築き上げた国であったことを想起すべきだという。つまり、デンマークは、「大国」主義を拒否することによって成功を収めたのである。

中村氏の主張に耳を傾けながら、私は内田義彦の「経済人について」と題する短文のことを思い出していた(『形の発見』藤原書店、1992年に所収)。内田氏は語る。――森鷗外の「当流比較言語学」というエッセイには、こんなことが書いてある。ドイツ語の「シュトレバー」(努力する人)には、嘲る意味が込められている。彼らは、たとえば、学問や芸術を出世の手段にしているような人を指してシュトレバーと言う。しかし、日本語には、シュトレバーに相当する言葉がない、と。そして、まさにシュトレバーを賤しむ思想がないがゆえに、日本は経済でも学問でも教育でも高度成長を

遂げることができた。しかし、シュトレバーは決して近代人の特質ではない、と内田氏は強調する。

「休暇がそうでしょう。休暇を法的には取れなくても、休めば仕事を取られちゃう。休暇がなかなか取れないという実力グループの一員であって始めて人並みの存在なので、「何時でもお休み下さい」と言われるようでは人間にあらず、社員であって人並みの社員でない。そういう何とかにあらずんば人にあらずという気風が体質的にあって、モーレッツ社員に人をかりたてている。こういう身分差、権利をもつものともたぬものの違いがあって、シュトレバーでないと、いつでも無権利状態におとし入れられるという仕組み——社内だけでなく日本全体にある仕組み、これはむづかしく言えば基本的人権の未確立といえます——が、モーレッツ人間であるように人間を追いこんで、それによって日本経済の高度成長も遂げられた。しかしまた日本経済の破壊がもたらされた。」(『形の発見』, 62ページ)

こうして見れば、現代社会の病理と言われているものが、実は、明治以来の近代日本の特質に根ざしたものであることに気づくのである。

## II

本書の中で理論的にもっとも興味深いのは、K. J. アローの『社会的選択と個人的評価』(1951年)の考え方を少しく変わった文脈に応用した消費社会論であると思う。「少しく変わった文脈」という意味はこうである。

アローの議論の骨子は、相異なる諸個人の選好から一義的に社会的選択を決定できるような合理的かつ民主的なルールは存在しない(一般可能性定理)というもののだが、中村氏は、この考え方を「個人」内部の「諸欲求」が一つの行動として現われる過程にも適用しようとする。

「すなわち、『個人』内部の『諸欲求』の間に何らかの特殊な型があるのでないかぎり、あるいは独裁的なある欲求が支配力を行使するのでないかぎり、それらは一つの行動として決裁されることはないはずである。消費者『個人』の内なる『諸欲求』が、それぞれに自己主張を展開するならば、人は、重層的な非決定の状況に置かれるにちがいない。にもかかわらず、われわれは、日々、消費行動を展開しているのである。

胃の腑の欲求がそれこそ『独裁的』な強さをもって支配していた『貧しい社会』では、『諸欲求』はほぼ一元的に整序づけられていたであろうし、またプロテスタン

ティズムの倫理が人々の内面を強く支配していたような状況下でも、これまた『諸欲求』は『独裁的』に決裁されていたにちがいない。しかし、その種の『独裁的』な欲求の存在しないのが現代の『豊かな社会』の特徴でもあろう。豊かさは、『諸欲求』の民主主義を推進する。そして、自己主張を始めた『諸欲求』は、容易には決裁されない。人々は、良き受験生たらんとして、良き社会人たらんとして、良き妻・賢い母たらんとして、ある種の『独裁力』を行使して『諸欲求』の整序を試みる。」(26-27ページ)

これは、極めてユニークな視点であるように思われる。そして、この視点があるがゆえに、中村氏は山崎正和氏の『柔らかな個人主義の誕生』(中央公論社、1984年)には与することができなかった。というのは、山崎氏が独自の「消費」概念(「ものの消耗と再生をその仮の目的としながら、じつは、充実した時間の消耗こそを真の目的とする行動」としての消費)をもって現代の産業活動を「自己探究の過程」として魅力的に描くことに成功したものの、そこに中村氏がまさに問題にしている消費社会のもつ弊りのようなものが全く感じられないからである。

「産業化と経済成長のもたらした豊かさの中で、人々は、自らの内なる諸欲求のせめぎあいの中で揺れている。こうした状況を、商品との対話を通ずる自己探究の過程、『柔らかな個人主義』と『顔の見える』大衆の時代として描くことも可能ではあろう。しかし、自己探究という言葉のもつ幾分醒めた、そして幾分かは楽観的な響きとは異なって、現代人は、手にしたほどほどの豊かさと自由の中で、多様化や個性化をわがものとするというよりは、むしろ圧倒的なものが存在しない空白の中で、自らの位置を探しあぐねているようでもある。消費社会の賑わいは『サチコ』の孤独と背中合わせになっているのではあるまいか。」(38ページ)

中村氏がどこでこうした着想を得たのかは定かでないが、推測するに、氏がガルブレイスやヴェブレンなどの異端派経済学(特に、彼らの消費理論)を研究した経験が少なからぬ影響を及ぼしているのではないか。たとえば、ガルブレイスの有名な「依存効果」(「欲求が生産に依存するようになる」状態)に触れながら、しかし、依存効果が発生する基盤には、消費者の中に外部効果を受け入れる何らかの「構え」があるはずだと、次に消費者の欲求の構造の分析に進んでいく中村氏の立論にそのことが感じられる。

いずれにせよ、本書が現代の消費社会論の盲点を鋭く突いたものであることは確かで

あろう。このことが中村氏のような経済学者によってなされたことがまたユニークであり、注目に値すると思う。

### III

さて、最後に、中村氏が近年あたためてきた「時間の豊かさ」という論点を取り上げることになろう。

日本は、戦後四十数年もの間、一貫して経済成長を追い求めてきた結果、現在では、あり余るほど豊かな財・サービスが氾濫するようになった。にもかかわらず、われわれは豊かな時間をいまだに享受できないでいる。これは、大人だけの問題ではない。いまや小学生でも腕時計を持っているが、彼らも決して「自分の時間」を楽しんでなどいない。それどころか、いつも腕時計を気にしながら、時間に追われているというのが正しい。中村氏は言う。「腕時計、すなわち、リスト・ウォッチ。ひょっとして、われわれは、時計に『ウォッチ＝監視』されているのではあるまいか。腕時計は、われわれの手にはめられた手錠であるのかもしれない。」(94ページ)

労働時間を考えてみよう。製造業の年間労働時間の平均は、アメリカやイギリスが1900時間台、ドイツやフランスが1600時間台であるのに対して、日本は2100時間台もあるという。この問題は、労働時間の短縮によって直ちに解決されるというほど単純ではない。なぜなら、日本人の余暇の捉え方は、どうしても「余った残りもの」といったふうになりがちで、余暇本来の意味を忘れているからである。

かつて、J. ピーパーは、『余暇と祝祭』(1965年)において次のように言ったという。ギリシャ語では、「スコレー」(学校)とは、本来、「余暇を豊かに過ごす」という意味で、余暇のないこと(「アスコリア」)が実は怠惰の本質であった。そして、「余暇を豊かに過ごす」ことの最高の形態が「コンテンプラチオ」(観想)であり、人間は祝祭を通じて生命と存在の根源に交わって、自らを取り戻すのだ、と。中村氏は、このピーパーの考え方に学んで、現代の日本では、「時短によって生じた『余った残りもの』をいかに過ごすかではなく、いかに人間的に『余暇を豊かに過ごす』かが生活の中心問題」にならねばならないと主張するのである(127ページ)。

こうした議論を聞いていると、中村氏が『歳時記の経済学』の著者であったことが改めて想起される。この本は、「余暇を豊かに過ごす」生活態度が身に付いた人にしか書けない本である。そして、中村氏が「方法としての歳時記」を本書の補論として収め



たのも、前著以来の問題意識を読者に訴えかけようとしたからではないか。時間に追われた生活の合間に時として雑木林に誘われるという中村氏は、産業社会の住人が季節を時間に、土を土地にといった読み替えを行なっているうちに、逆に、現実の方が、単調な時間の流れでしかない季節、土地でしかない土というふうに、モデルに近づいてきた現状を憂えているのだと思う。

本書が『豊かさの孤独』と題されているのは、その意味では、まさに慧眼であると言わねばならない。